

三木先生のご退官によせて

岡崎 眸

三木先生に初めてお会いしたのは、7年前の東京で、その夏一番の暑さを記録した日であり時間でした。それは就職のための面接試験の場、三木先生は面接官、私はされる方でした。かんかん照りの夏の日差しの外から入った面接室は一瞬とても暗く感じられ、目が慣れた瞬間、予期せぬほどの何人もの面接官の先生方がいらっしゃることが分かり、頭の中が真っ白になりました。ところが、矢継ぎ早に次々と様々の質問がいろいろな方角から飛び込んできて、私はただただ戸惑うばかりで、何一つ満足にお答えできませんでした。その晩、三木先生からお電話をいただきました。私はまたしてもしどろもどろになり、初めての先生とのやりとりはスムーズなディスコースからはほど遠い有様でした。

それから幸運なことに6年間ご一緒することができました。その間いろいろなことがありました。まず、我が家は姑も夫も三木先生の大ファンです。もちろん直接の面識があってというのではなく、姑はNHK教育テレビの先生のご講義を通して、夫は先生のご著作を通してです。おかげで以来、日本の古典文学に全く素養のない私でも、少し鼻の高い思いをしながら先生の職場でのエピソードの幾つかを披瀝し、彼らの話の中に入ることができました。

最初の3年間は毎週水曜日に会議をご一緒いたしました。それは、国文学科との共同の会議であったり、日本語教育だけの小さいコース会議であったりしました。特に、主任の長友先生が春から秋まで研究休暇でいらっしゃらなかったときなど、一から十まで三木先生に助けていただきました。先生がコース会議に加わってくださっているだけでも万事大丈夫と思われたものでした。

また、大学院入試の問題作りや口述試験、入学時のオリエンテーション、修士論文の中間発表会、修士論文の口述審査、修了判定、修了生の予餞会や修了を祝う会など、三木先生がご参加くださることで、日本語教育というどちらかと言えば大学の周辺部に位置する私たちの小さなコースが、それでも少し大学の正統部分に繋がっていているという感じをもつことができたように思います。三木先生がことある毎におっしゃってくださった「日本語教育の院生は元気がある、活気がある、覇気がある」とい

う励ましのお言葉がどんなにか院生や私たちにとって励みになったことか。それを口になさるときの先生のご表情やお声の調子、そしてそれが聴いているものの息づかいとこだまし合っていくときの快感は今でも忘れることのできない大切なものです。

大学改組の中で日本語文化専攻から日本語教育コースへと名称も変わり、三木先生の大きな庇護の下から雛がかえるように、少しずつ自立の道を歩んできております。とてもありがたいことと感謝いたしております。

中島みゆきがお好きでコンサートにもいらしたことがおありと伺ったときは先生を古くからのお友達のように感じたものでした。また、若かりし頃の女子学生補導のためにお巡りさんもどきのことをなされたと伺ったときは、「若い人」の時代を連想したりしました。また、いつか、文教の教授会が、教授会自治をめぐって様々の相反する発言が相次ぎ、重苦しい雰囲気にも包まれたときに、先生のなされたご発言ははっきり記憶に残っております。私たちの少し上の、いろいろなものももっと輝いていたであろう良き時代を支えた方たちの心意気とはこのようなものかと感じ入ったことでした。

アクアラインにて通っていらっしゃる海の向こう側の生活は如何でしょうか。きっと生活の楽しい一こま一こまを切り取り、お得意の記憶と記述力にものを言わせて、周囲の方々の胸に、それとして、刻み込んでいらっしゃることに拝察いたします。

ありがとうございました。